

平成 23 年「ガラス産業連合会新年会」報告

(社) ニューガラスフォーラム

Report on the New Year Party of the Glass Industry Conference



(左から、硝子繊維、電気硝子、硝子製品、板硝子、ガラスびん、NGF の会長)

都内では、20日間連続の乾燥注意報が出されたほどの晴天の中、1月19日(水)、午後4時から6時まで、皇居お堀端近くの東京會館で「ガラス産業連合会（GIC）新年会」が開催されました。平成14年（2002）から開催して丁度10回目の新年会です。今では、ガラス業界の風物詩とも言える集いとなりました。ガラス業界の共通的な事項を実施する連合体としてGICが設立されたのが平成12年ですので、設



(皿澤修一 GIC 会長)

立後間もなく目玉事業として統一新年会がスタートしたわけです。当初は、業界毎に会場でメンバーが固まってしまう参加者の横の交流がないのではないか、との危惧があったのですが杞憂でした。むしろ、各業界別に新年会を行っていた時と比べると、掛け持ちで関係団体の会に出席する手間も省け、また、費用分担により経費節約にもなると好評です。主催は、板硝子協会、硝子繊維協会、(社)日本硝子製品工業会、日本ガラスびん協会、電気硝子工業会、(社)ニューガラスフォーラムの6団体で、順番に司会を担当します。今年は、牧有二・板協専務理事の司会で、皿澤修一 GIC 会長（板協会長・セ

ントラル硝子社長)の挨拶の後、川上景一・経済産業省大臣官房審議官(製造産業局担当)の祝辞がありました。その後、山中衛・GIC副会長(NGF会長・HOYA相談役)の乾杯で懇親会に移り、平尾一之・京大教授による“関東一本締め”でお開きとなりました。なお、経産省からは、土井良治・住宅産業窯業建材課長、高辻育史・日用品室長を初めとした多数のメンバーの出席がありました。

皿澤会長の挨拶の概要は、以下のとおりでした。

「平成22年度は、ガラス産業連合会が設立10周年の節目の年であった。この10年間には現在の6団体が一致団結し、プロセス技術、材料技術、環境技術などの技術部会、環境広報部会などの部会活動を通じて“ガラスの夢と未来”を求めながら官庁、学界の指導の下、ガラス業界として多くの業績を残してきた。とりわけ昨年、10月に我が国のガラス産業の課題と将来展望、課題達成のロードマップを纏めた「ガラス産業技術戦略2030年」を製本・配布し、また、11月にはガラス産業の160に及ぶ製造プロセスを取り纏めた「ガラス製造プラント百科」をCDとして完成したことは、大いに評価に値するものと確信している。その他、ナショナルプロジェクトの「三次元光デバイス及び次世代光波制御」、「革新的ガラス溶融プロセ

ス技術」が順調に進行している。環境技術として、産総研との共同提案により有害微量成分分析マニュアルのJIS化作業に取り組み、昨年3月にはJIS R 3258「ガラスの中の微量のカドミウム、クロム、鉛の定量方法」として制定された。また、SVHC(高懸念物質)追加14物質との関連についての見解書「REACH規制への対応について」をホームページ(HP)に公表した。環境対応活動として、CO₂削減自主行動計画のフォローアップを行い、2010から2012年削減目標を13.0%から17.6%に上方修正したこと、びん協会が積極的にカーボンフットプリント制度へ取り組んでいることなどの成果を挙げている。また、ガラス産業連合会のHPのリニューアルにも取り組んできた。さらに、一般の皆様に対する「未来のガラス」の公募に対して数多くの楽しいアイデアの応募をいただいた。今回、新たに「ガラスの世界地図」を公開し、世界中のガラスの情報を募集している。明けた本年の国内経済は、一時の最悪期は脱しつつあるものの、相変わらずの厳しい雇用情勢やデフレの進行など予断を許さぬ環境である。そうした中で、ガラス業界も含め産業界は激化する低コストでの国際競争に直面しており、この局面で勝ち残るためには我が国の誇る技術力こそが決定的要因であると確信する」。

今回も、産・学・官・プレス・団体から関係



(川上景一審議官)



(山中衛 GIC副会長)

者 330 名ほどが参加して盛況でした。一堂に会したガラス関係者の集団を目の前にして、ガラス関係者の広がりをも具体的、アナログ的に認識しえたとの感覚を得ると同時に、心強さも感じました。そして、お開き近くまで多くの参会者が帰らなかったことが、何よりも会の成功を物語っていました。

日本の大学のガラス研究者地図

